

週刊

2011年11月30日 No.12

晩 原発関連情報

インターネットをしらない人のために

編集・発行責任/853-3321 長崎県新上五島町綱ノ浦85-37 歌野 敬
☎0959-42-3427 eメール utano@lime.ocn.ne.jp

防護服の男

前田基行 (朝日新聞記者)

朝日新聞 10月3～16日連載記事から(承前)

(9) そのときは言えなかった。すまなかった

浪江町の、赤宇木(あこうぎ)地区に住む、三瓶(さんぺい)ヤスコ(77)は、隣の飯舘村から嫁いで55年になる。

菅野みずえとは、公民館の民謡サークル仲間だ。

ヤスコは8月初めまで、細い山道を上った一軒家に1人で住んでいた。地震直後は、神奈川県の子孫の1DKのアパートに、富岡町の長女と孫息子の3人で避難した。しかし、隣室の食事の音まで聞こえる。周りにも気を使う。

「この年になると都会の生活は合わない」犬と猫のことも気になり、4月末に赤宇木に戻った。

そのころは、まだ地区に数世帯が残っていた。そのうち1軒減り、2軒減り、誰もいなくなった。警察が30キロ付近で通行規制を始めると、車も通らなくなった。さみしくなった。夜は真っ暗だ。何も考えないように思っても手が震え、食べ物がつかえた。

気晴らしに近くをドライブした。しかし、帰り道はどの家も明かりはない。山道を落ちて、だれも助けにきてくれないと思うと、ドライブが怖くなった。

日曜になると、背中に「文部科学省」と書かれた作業服の男たちが、地区に放射線量を計測にきた。ヤスコは、車がくると出て行き、「今日はなんぼですか」と尋ねる。「15マイクロシーベルトだよ」男は気軽に教えてくれた。「私の家も測ってくれませんか」

別の日、男は家の周辺を測ってくれた。家の外で10マイクロシーベルト、居間で5.5マイクロシーベルトあった。平常値をはるかに上回る量だ。男はそれを紙に書いてヤスコに渡した。

6月初めのある日曜日、男がポツリと言った。「今だからいうけど、ここは初め100マイクロシーベルトを超していたんだ。そのときは言えなかった。すまなかった」

その後も、男は「参考にして」といって、各地域の放射線量が書かれた地図を、ヤスコにくれた。だが、ヤスコは8月初めまで赤宇木にとどまる。「放射能は目に見えるわけでないし、数値を聞いてもよ

く分からなかったのよ」

8月初め、二本松市の仮設住宅に当たったため、赤宇木を出た。しかし、今も2日おきに、約25キロ離れた自宅まで車で通う。犬と猫にえさをやるためだ。

(10) 口止めされた警察官

関場和代(52)は3月14日、会津若松市の親類宅に避難した。

家は、菅野みずえの家に近い、浪江町南津島にあった。

その後も、避難指示がないため4月2日、ひとまず自宅に戻った。数日して、家の前に自衛隊のジープがとまり、隊員が降りてきた。安否確認で来たという。

そのころ、浪江町の放射線量が高いことが報道されていた。それが心配で、おそろおそろ尋ねた。

「この辺の線量はどのくらいですか」隊員はにっこり笑い、ここは大丈夫だと答えた。「私たちは線量計を付けています。1日にどのくらい線量を浴びたか分かるんですよ」和代はそれで安心した。家に閉じこもるのをやめ、近所に出かけていった。

4月17日。近くの橋の上にいると、男が近づいてきた。フリージャーナリストの豊田直巳(55)だった。和代が、自宅の線量を測ってほしいと頼んだ。豊田は、敷地のあちこちを測りはじめた。

玄関の雨どいの下を測ったとき、豊田が「ワッ、これは大変だ!」と叫んで立ち上がった。ためらう豊田に、和代は「本当のことってください」と頼んだ。

「2時間いたら、1ミリ吸います」と、豊田は答えた。豊田によると、そのときの線量は、毎時500マイクロシーベルトを超えていた。2時間いただけで、年間許容量の1ミリシーベルトを超える値だ。

具体的な数字を初めて聞かされ、大変なことだと初めて自覚した。和代はあわてて身支度し、豊田に見送られて家を飛び出した。

数日後、ネコを引き取りに、再び家に帰った。警視庁のパトカーが敷地に入ってきた。「ここって高

かったんですね」と、30代ぐらいの警察官に聞いてみた。

「そうなんです、高いですよ。でも政府から止められていていえなかったんです」警察官はそう答えた。和代はびっくりした。ジープの自衛官がいったことは何だったのか。

「もし自分の家族だったら、同じことがいえますか。真っ先に逃がすでしょう。私らのことはしよせんひとごとなんですかね」

7月、中国の高速鉄道事故で、証拠隠しが発覚した。日本のメディアは、中国政府の対応を厳しく批判した。和代は腹が立ってくる。

「日本だって同じじゃないの」

(11) あの2人のおかげで

菅野みずえの家に避難した25人は、「白い防護服の男」の情報とみずえの判断で、それぞれ再避難し、危険な状況から逃げる事ができた。

大量の放射性物質が飛び散り、住民が被曝(ひばく)するかもしれない、緊急の時期だった。しかし、政府も東京電力も、それを住民に教えなかった。しかし25人は、混乱を起こすこともなく、冷静に動いている。

みずえは今、福島市に近い、桑折町(こおりまち)の仮設住宅で暮らす。

「ほら、見てください」みずえは空き地で遊ぶ子どもたちを指さす。「あんな小さな子が、避難生活の苦勞を背負って、これから生きていくんですよ。もし被曝していたら……」

それにしても、あの白い防護服の男たちは、一体だれだったのか。みずえは今も考える。

そのころ福島県内は、文部科学省や福島県、日本原子力研究開発機構、東京電力、東北電力などの計測車が走り回っていた。

例えば、新潟県からの応援車もきていた。3月12日夕のちょうどその時刻、津島地区を通っている。

新潟県の職員2人は、原発事故対応の支援のため、ワゴン車に乗って福島県に入った。114号を浪江町に進み、津島地区を通った。午後4時ごろ、その先の川房地区で、警官に止められて引き返している。

その職員に話を聞くことができた。ただ、内部被曝してしまったので、名前が出るのは困る、とのことだった。

職員によると、当時、測定器は激しく鳴りっぱなしで、焦っていた。津島地区を通ったとき、車がたくさん止まっていたので、避難所だと思った。

「防護服? いいえ、着いていませんでした。車を降りてもいません」

14日未明には、放射線医学総合研究所のモニタリングカーが、津島地区を通過している。まだ、大勢の避難民がいたころだ。車には測定器などを積み込

んでいたが、「資材を運ぶのが目的だった。放射線量は測っていない」(広報課)という

みずえが会った2人は、そうした計測チームの一つだった可能性が高い。

「あの2人の警告のおかげで逃げられた。それをなぜ、国や東京電力は、組織としてしてくれなかったのだろうか。もっと多くの人々が逃げる事ができたのに」

曲がり角からどこへ? 山田孝男

高速増殖原型炉もんじゅを視察した細野豪志・原発事故担当相(40)と記者団の間で、こんな問答があった。

――感想を。

「ひとつの曲がり角にきているのかなと……」

――廃炉も含めて検討すべきだと考えますか。

「……そういったものも含めて検討していくべきだと思います……」(26日)

これが、細野「廃炉検討」発言の核心である。

細野が何かものすごいことを言ったのかということ、そうではないと私は思う。

もんじゅの存廃をめぐる攻防は、マスコミの表面でこそ廃炉派が優勢だが、政策の決定権は推進派が握っている。推進派は騒がない。その沈黙には「言うだけ言わせておけ」という含みがある。微妙な情勢の中で細野は明言を避けた。それが真相だと筆者は考える。

何かものすごいことが決まったかと見えて、実はそれほどでもないのが、野田佳彦首相肝煎りの「提言型政策仕分け」である。日曜(20日)返上で激論の末、もんじゅを「抜本的に見直す」ことにした。

仕分け人は、もんじゅ関連の来年度予算概算要求215億円のうち、22億円のムダを指摘した。だが、もんじゅは必要かという基本の議論を避けているから、残る193億円に切り込めない。「抜本的に見直す」という宣言は「後はよろしく願います」という仕分け人の希望の表明に過ぎない。

ではなぜ、政策仕分けは基本的な議論を避けたのか。原子力政策の基本を検討する原子力委員会(近藤駿介委員長)に遠慮したからだろう。

もっと言えば、仕分けを所管する行政刷新会議に、原子力委の上部組織であるエネルギー・環境会議(議長・古川元久国家戦略担当相、関係閣僚と民主党幹部で構成)がクギを刺したのではないかと。「原発の賛否に踏み込むな」と。「来年夏、新原子力政策大綱がまとまる。それまで騒ぐな」と。

報道の表面を見ていると、もんじゅは廃炉へ向かって進んでいるように見えるが、実態は違う。残念ながら、それが現実だ。構想44年、延べ1兆円の国費

を投じてなお、もんじゅは動かない。動く見通しもない。だからこそ、震災直後に研究開発中止の声が高まったが、今は「ムダを省いて開発を」という論者が巻き返している。

原発から出る核のゴミ（使用済み核燃料）を再処理してプルトニウムを取り出し、それを燃やすのが高速増殖炉だ。この循環（核燃料サイクル）が成立しない限り、ゴミは原発にたまり続ける。現に昨年9月時点で全原発の使用済み燃料貯蔵プールの容量2万420トンに対し、既に66%にあたる1万3530トンが蓄積している。

このデータは今年5月、筋金入りの脱・原発、脱・核燃サイクル論者である自民党の河野太郎衆院議員（48）が経済産業省に請求して明るみに出た。東京電力・福島第1と第2、中部電力・浜岡の各原発停止を前提に試算しても、あと6年弱で使用済み燃料プールは満杯だと河野は指摘している。

原発からあふれ出ようとしている膨大な核のゴミをどうするのか。夢の中にとどまって現実から目をそらすという選択肢はない。夢から覚めて繁栄の後始末に立ち向かうしかない。首相も、原発事故担当相も、曲がり角をしっかりと曲がっていただきたい。

（敬称略）

「大丈夫」思い込もうとする空気 伝えたい

中日新聞 北陸発 11月17日

●子連れ避難 元キャスター金沢で決意

福島テレビ（福島市）で十五年にわたりアナウンサーとして活躍した原田幸子さん（37）が、東京電力福島第一原発事故を契機に長女の真帆ちゃん（6つ）と実家のある金沢市に避難している。「故郷」と呼ぶはずだった福島だが、第二子の妊娠が分かり七月で退社。福島を離れた。「報道に携わった一人としての経験を多くの人に知ってほしい」と今、金沢市であるイベントなどで自らの経験を語る。

夕方のレギュラー番組でキャスターを務めるはずだった三月十一日。揺れが襲った直後からヘルメットをかぶってカメラに向かう。保育園に預けていた娘の安全を確認できたのは夜だった。夫は他局のアナウンサーで、母娘の二人は三日間、局で寝泊まりした。

1号機が爆発し、十四日朝、金沢の両親に頼んで娘だけお避難させた。3号機爆発による大量の放射性物質が福島市に届く直前だった。

三月中に初めて金沢に戻った時、友人が食事に連れ出してくれた。豊富な食べ物、汚染を気にすることもない。「これが普通の生活だったんだ」。涙が出た。

*ふくらむ疑問

それから福島と金沢を行き来する。「東北新幹線

11.17 たね蒔きジャーナルから 小出裕章

Q 福島県福島市大波地区でとれたお米から、暫定規制値を超える放射性セシウムが検出されたというニュースが伝わっています。農家が自分の家で食べようと思っていたお米を詳しく検査したら規制値以上だったという。福島県のお米というのは収穫前と収穫した後、これまで2回も検査して大丈夫ということ、県知事も安全宣言を出していたんですが、今回検出ということになりました。

小出 ある意味当然なことだと思います。環境というのは、実験室で実験をするように均一な条件はありませんので、汚染の強い田んぼもあるし、汚染の低い田んぼもあるだろうと思います。そしてそこでどういう肥料を使ってるかということで、お米に移るセシウムの量も変わって来てしまいますので。今回の数字は私はちょっと高いなという印象を受けましたが、やはり高い場所はあると覚悟しなければいけないと思います。

Q 今までのような検査方法では、完全に検査が出来てるとは言えない。

小出 もちろんです。福島県内の田んぼと言ってももう山ほど広大な田んぼがあるわけですし。抜き取り的にあちこち何箇所かで測ったところで、

そこからこぼれ落ちてしまうものももちろんあるわけですから。本当であればもっときめ細かくやらなければいけないのだと私は思います。

Q でも県知事が、安全宣言という形で出していたことについては、先生はどう思われますか

小出 県知事としてはもちろん安全宣言をしたいでしょうし、このまま行ったら福島県の一次産業が本当に崩壊してしまう危機に瀕していますから、なんとか安全だと言いたいというお気持ちは分かります。でも残念ながら簡単には行かないだろうと思います。

Q 今回この大波地区のお米を出荷停止にすると政府が方針を決めたんですが、こんなモグラたたきのように見つかったらそこを出荷停止にする。こういうことをま続ていくほかないんでしょうか

小出 多分そうでしょうけれども。私は出荷停止というより、むしろ東京電力の社員食堂に回せばいいんだと思います。近隣のものはもちろんそうして欲しいし、国会議員の議員食堂とかに回して欲しいぐらいに思います。せっかく農家の方が作ってくれてるお米ですので、出荷停止、そして廃棄というような方策には、私はしてほしくありません。

で途中、マスクをするのが戦場に帰るために切り替えるスイッチ」だった。

伝えるニュースに「これでいいのか」という疑問がふくらんでいく。例えば福島駅近くでサクランボをほおぼる幼稚園児の話題。洗わないまま『おいしい』と言って食べる“安全性”のアピール。「これって放送していいの？」と思わずにいられない。

原発報道でテレビへの信頼が失われていくのを実感する一方で「テレビが言ってんだから安全だべ」という人も。本当に福島の人たちに必要な情報を伝えているのか自問した。

以前から熱望していた妊娠が分かったのはそんな時。「まさかこんなタイミングで」。母親として踏

ん切りがついた。福島にはまいられない。「命って引き継がれていくんだと思う。これだけの犠牲があったのだから、強い子になる」。現在妊娠八カ月。男の子と分かった。

*感じる引け目

福島で今、一番の話題は除染。「大丈夫だと思おうとしているよう。残った人はそういう精神状態になるし、メディアもその方向に進んでいくような気がする」。けれど除染にどれだけかかるのだろう。

「県をなんとか維持したいという人たちの思いを感じ

じる」

最近の電話で知人から「日常の生活で（放射能を）気にするのにも限界がある」と聞いた。「金沢に実家のある自分は幸運。すべてを捨てて福島を離れるのは並大抵じゃない」

半面、避難した人は引け目も感じる。取材されたくない人は金沢にも数多い。だからこそ、報道に携わった者として、経験を自分が話したい。福島のことを聞いてほしい。原発事故の反省を生かさせなければ、福島が被った犠牲の意味はないから。

日本政府は原発運営企業を臨時的に国有化すべきである

イギリス『エコノミスト』誌 11月5日付

「これは人類とテクノロジーの戦争だ。戦っている間に破産問題を話し合うべきではない。」と、3月11日の津波の後で福島第一原子力発電所の原子炉3基がメルトダウンした東京電力に対する、政府の第一次支援金5兆円(640億ドル)の発行を調整する担当官は述べた。

この支援には二つの正当な目的がある。まず、発電所から半径20km(12.5マイル)以内の住居を捨てて避難せざるを得なかった8万9千人に対する保証金を支払う補助となる。実際、中間地帯では農場の家畜と野生化した家禽が通りを歩き回っている(記事参照)。これは、また福島原発の完全停止のデッドラインである年末を前に、東電が債務超過で混乱に陥るのを防ぐ。

責任を曖昧にしてはならない。しかし目的は、より堅固で安全なエネルギー産業を打ち立てることであるべきだ。東電がまだ民間企業であり続けることが、その実行の深刻な障害となっている。政府は東電を国有化するために速やかに行動すべきで、臨時の国有化により、古い管理体制の一新とその監査が行える。その後、徹底的に再構築された公益事業として、再度民間企業に戻すべきである。東電が国有化されるべき3つの理由がある。

第一に、国有化は企業の責任を問うための基礎となる。破壊的な地震と津波を予測できず、震災後の惨憺たる対応しか出来なかった東電は、その管理組織が殆ど以前と変わらず、株主と債権者は蚊帳の外のみである。東電に金を注ぎ込む事が、日本がこの核問題で混乱する理由となった原子力産業と政治的監督者たちの一種の共謀関係を暗示する。5兆円の資金は東電の手に渡るが、東電にはその金額を貸借対照表にローンとして記載する法的な義務もなく、

また、どうして返済するかを述べる義務もない。現在のところ、株主でも債権者でもなく、納税者が全てのリスクを抱えることになる。

第二に、国有化を行うことで東電の財務的な再構築が安全だと確認することができる。東電は今後10年で2兆5千万億円のコストを削減すると合意したが、これにより安全面が犠牲になる可能性がある。既に、原発の作業員が穴の開いた長靴で放射生物質で汚染された汚水の中を歩いているという報告が上がっている。短期的には、運営者と監査機関の必要な区分けを再設定して東電を再度民間化する前に、政府が日々の作業の責任を負う主体となった方が、より安定した移行を行えるだろう。

第三に、国有化が行われれば、国家がこれ以上原子力産業に特別な支持を与えないという表明になる。介入が失敗すれば、いかに東電が、日本の他のエネルギー企業と同様に、政府を脅迫し続けているかということが強調されてしまう。言いなりのままに情報を伝えるメディアとサービスを水増し価格で売りつける巨大な企業にも後押しされて、原子力発電施設は巨大な政治力を帯びている。政府が東電の統制に失敗すれば、原子力エネルギーを巡る他の政策に対しても国民の信頼を失うことになるだろう。野田佳彦首相の約束した、現在殆どが停止している日本の54基の原子炉が安全に再運転できることを確認するための「ストレステスト」の実施についても同様である。

福島では汚染地区の広大な表土を除染する作業費も含めて、今後とも大量の資金が必要となるだろう。政府が東電の国有化に躊躇し続けるほど、コストは累積し政治的行動の勢いが弱まるだろう。福島は災害によって何万もの人が家を、職を、そして子供の健康に対する自信を失った。彼らの苦しみを無に帰してはならない。